

安富王子台遺跡発掘調査概報

— 島根県益田市 —



昭和56年（1981）

益田市教育委員会

例　　言

1. 本書は、益田市教育委員会が国庫補助を受けて、昭和55年度に実施した安富王子台遺跡の発掘調査概報である。

2. 調査は、遺跡の範囲と性格の確認を行ない、遺跡の保護対策をたてるための資料を得る目的で行なわれた。

3. 調査組織

調査主体 益田市教育委員会 教育長 河重貞利

事務局 益田市教育委員会 社会教育課 田原日出男、益成隆人、椋行雄、
徳屋典彦

調査指導 広島大学 潮見浩、川越哲志、河瀬正利

島根県埋蔵文化財調査員 岩谷建三、杉原清一

島根県教育庁文化課 石井悠、勝部昭

調査担当 島根県立博物館 村上勇

4. 調査にあたり、土地所有者の椋忠延、宮内多賀夫、田原長一、大石義男、渋谷五郎、渋谷留市の諸氏には多大なご協力を頂いた。記して感謝の意を表わしたい。

5. 発掘調査、遺物整理、報告書作成に下記の方々の参加、協力を得た。記して感謝する。（順不同 敬称略）

宮内千代子、松本正一、松本初子、宮内多賀夫、柳井数恵、柳井民子、石川一行
坂田美恵子、萩雅人、川原和人、西尾克己、蓮岡法暉、井上洋子、卜部吉博、吉野貞男、椋麗子、渋谷美津子、領家満恵、椋芳男

6. 本書の編集執筆は村上勇が行なった。

7. 附として調査担当者が島根県立博物館発行の博物館ニュースNo.26に掲載した一文を一部改変して収録した。

I. 調査に至る経緯

本遺跡の発見は、昭和28年1月、益田市安富の椋忠次郎が、同家裏の果樹園内に溜池を掘った際採集した土器を、益田高等学校教諭であった鳥居勇が確認したのが端初である。

この年の3月26・27・28の3日間、小規模な調査が益田高校の鳥井・岡崎三郎両教諭と学生の手で実施されている。⁽¹⁾ 昭和28年の調査は椋宅裏を中心に実施し、多量の土器と石器が出土した。調査者は土器は縄文土器の粗製無文のものが多く、一部精製のものがあるとし、また、弥生時代の綫杉文を施す資料や彩色のあるものに言及している。石器は石鎌と石斧で、石斧は打製が大半と記し、特異な資料として土製紡錘車を指摘している。

この調査を契機に、安富王子台遺跡は広く学界にも知られ、特に縄文時代晚期土器の標式的遺跡として著名になった。⁽²⁾

昭和43年に発行された『新修島根県史』通史篇1においても、当時42ヶ所しか知られていなかった県下の縄文時代の遺跡の代表的なものとして紹介している。土器は九州の形式に類し、後期ないし晩期のものとされた。また、弥生時代の遺跡としても記述があり、前期及び中期初頭の土器が出土しており、高津川流域の相当広い冲積地の遺跡として注目している。

縄文時代晩期の土器と、それに続く弥生時代前期の土器が一つの遺跡から出土することで、石見地方における農耕文化生成の起源を具現化する重要な遺跡としての位置づけは、すでに発掘当初から見られるが、その後幾多の概説書、論文などに取上げられることにより、益々その存在が注意されるところとなっていた。

しかしながら、第1図にあるように、この遺跡のすぐ脇を国道9号線が走っており、今日の生活環境の変化は、それまで平野に広く展開していた人々の生活を国道沿いに集約するようになつた。そのことは、本概報の表紙に掲げた明治32年測図の5万分の1の地図と、昭和49年に修正された第1図を比較すると良く納得できる。前面の平野部に小路で繋がって点在した家屋が、山添いを走る国道9号線に並ぶように建つてゐる状態が看取できる。

したがって、既述のように、県下における重要な遺跡である本遺跡の周辺にも、開発の波が押し寄せて来つつある昨今、次第に遺跡が破壊される恐れが強くなつたので、遺跡の範囲を確認すると共に、性格の把握に努め、遺跡を保護する資料を得るために調査を実施することになった。

調査は昭和55年12月23日より発掘のための打合せに入り、昭和56年1月19日より開始し3月16日に終了した。

(1) 『曲玉』創刊号 益田高等学校考古学部 昭和29年

(2) 間壁忠彦・漸見浩「山陰・中國山地」『日本の考古学』II 河出書房昭和40年。

II. 位置と環境

益田市は東西に細長い島根県の西端に位置している。高津川と益田川によって形成された冲積平野と背後の丘陵は、北九州型の比較的温暖な気候の下に四季の悠久な変化を営んでいる。特に、高津川は山口県境いの鹿足郡内に源を発して日本海に注いでおり、古くからその流域にそって陰陽を結ぶ重要な交通路が発展していた。

安富は匹見川と合流した高津川によって拓かれた横田平野に面している。両川はそれまで狭隘な中流域を流下していたが、ここに至って初めて繋った平野の景観を望むことができる。この平野には数個所の遺物出土地があって、人々の重要な生活の場であったことがわかる。

第1図の1は從来言われた安富王子台遺跡である。高津川による河岸段丘上に立地している様子が第2図の遠景写真によってよく理解できる。第1図の2は『全国遺跡地図島根県』(昭和53年版文化庁)には、1と同様安富王子台遺跡名で登録されている。遺跡名の当否を別にすればこの地点からも遺物が出土する。第1図の3は、かつて縄目を施したほぼ完全な形の土器が天地返しの際に出土した。土地所有者の子息によって学校へ提出されたが今は不明である。第1図の17の地点でも石器等の出土を椋忠延氏よりご教示いただいた。第1図の4は三浦氏宅前の畑地で、山陰の須恵器編年のI期の蓋坏が土師器と共に採集されている。5は上野横穴で、東京国立博物館に収蔵された須恵器類の他に鉄刀が出土した。第1図6は右塔寺櫻現の経筒出土地で、現在県指定文化財となっている中国越州窯系の青磁を含む5口の経筒が豊田神社の蔵品となっている。

今、この平野部における遺跡の立地を、地形図や遠景写真によって子細に確認すると、圃場整備事業等による整然とした区画が実施されていない部分に多いことに気付く。そうした地点は、いずれも周辺部よりやや標高の高い地点であり、微地形を巧みに利用した原始・古代の人々の生活の在り方が窺われる。したがって、こうした地点では今後も遺跡が発見される確率は高いといえる。

周辺の関連遺跡としては、津和野町の大蔭遺跡や日原町内に数個所の縄文遺跡があり、弥生時代の遺跡として、下流の須子遺跡(第1図8)では石包丁が、12の日赤敷地遺跡では前期弥生土器が出土している。11は同じく前期弥生土器が採集されている松ヶ丘遺跡である。ここからは他にI期の須恵器・土師器・鉄刀が出ている。

この他下流の益田平野の周辺には多くの古墳時代の遺跡のあることは周知の通りである。



第1図 遺跡位置図 1・2 安富王子台遺跡

III 調査の概要

昭和28年の益田高校による調査が、椋忠延氏宅裏を中心としたものであり、これと、昭和48年の段丘縁辺部を通る水路の工事による採集地点を参考に、それらの地点を取り巻くように4カ所の調査区を設定した。特に第1区はこれまで多量の土器片等が出土した地点であったが成果が思わしくなかったので、新たに第5区を設定したところ遺物の集中的な出土があり、縄文遺跡の立地に具体的な資料を得ることができた。第3区では断面逆台形の溝と土壤が1基検出された。この溝の性格を知るため、第6区を設定したところ、ここでも続きと思われる溝が検出できた。

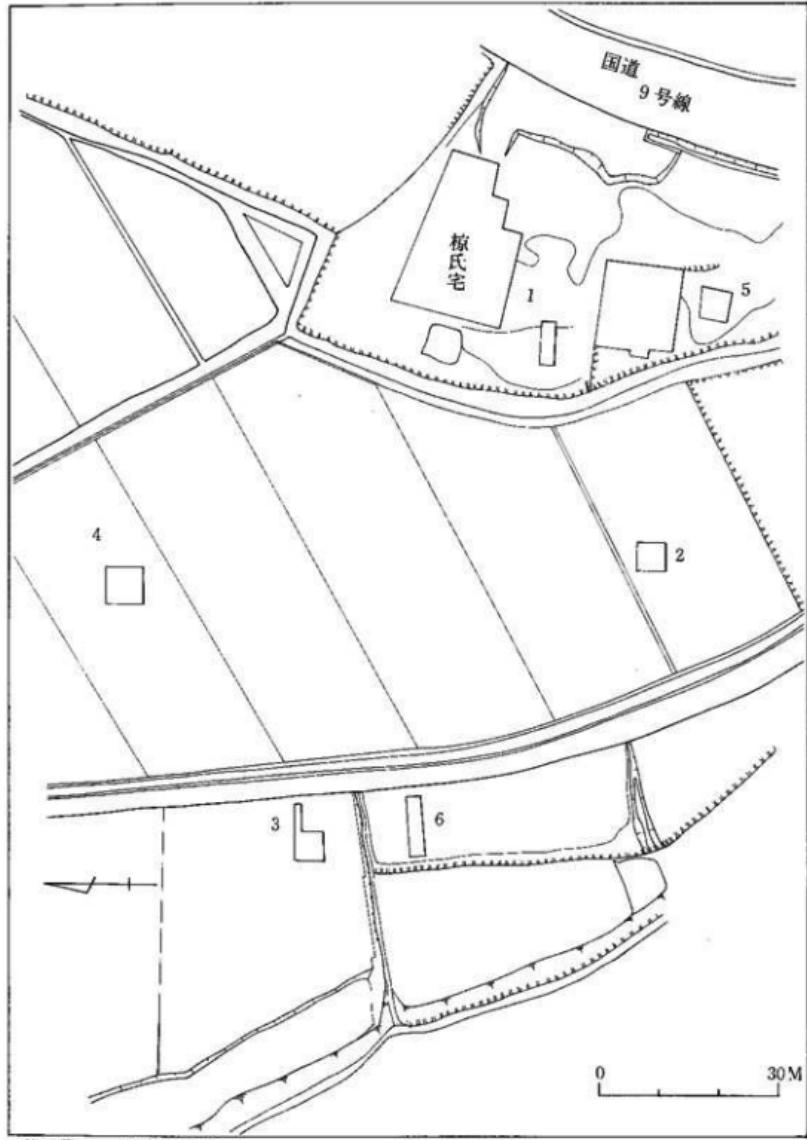
なお、段丘周辺の踏査により第3調査区の北100mの畠地からも石錺が採集された。

【第1区】

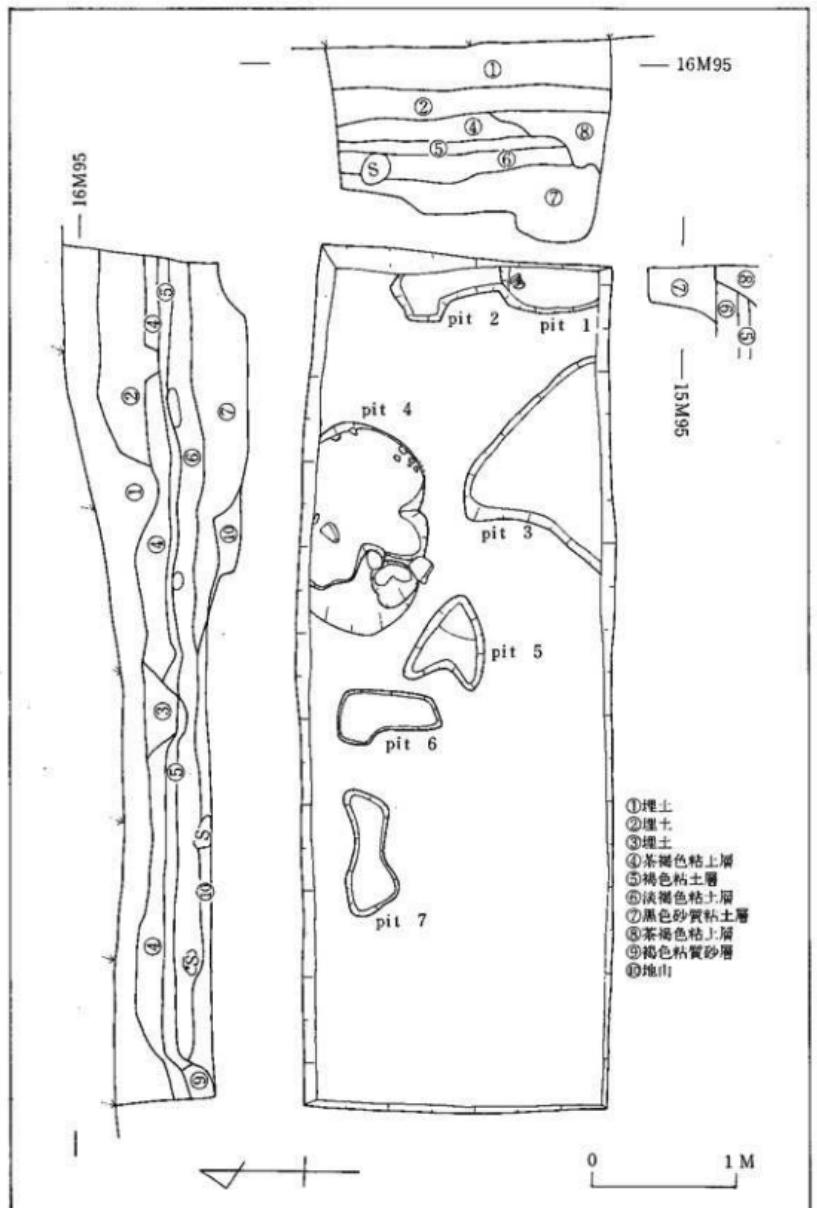
大きく突き出た王子台の下を走る国道9号線沿いに椋忠延氏宅があり、庭の雑木と畠の中には2m×8mの調査区を設定した。この地点は東側から丘陵がせまって河岸段丘に移る変換点で、わずかな傾斜地となっている。調査区は昭和28年に土器が発見された地点の西隣りである。調査区の東側は埋土が60cm程堆積しており、相当な範囲に渡って擾乱を受けていたことを考えると、あるいは益田高校の実施した調査区と重複したものとも考えられる。擾乱を



第2図 遺跡遠景



第3図 調査区配置図



第4図 第1区実測図



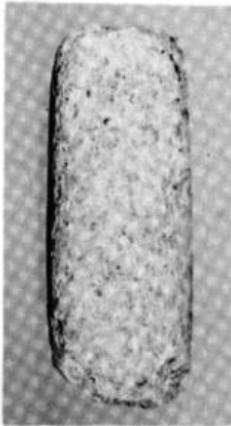
第5図 青磁碗(第1区)



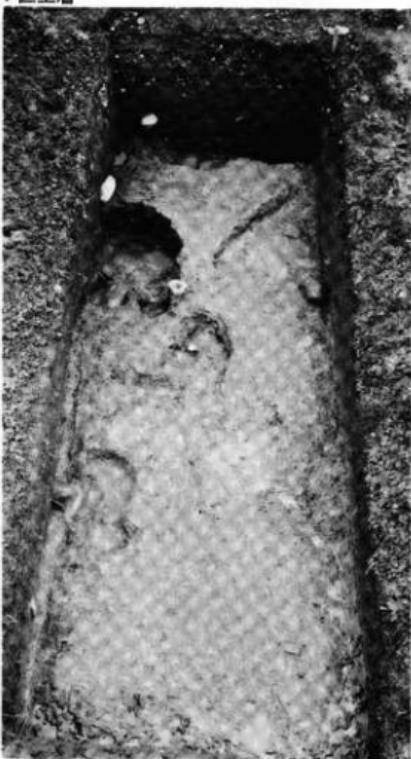
第8図 第1区土層



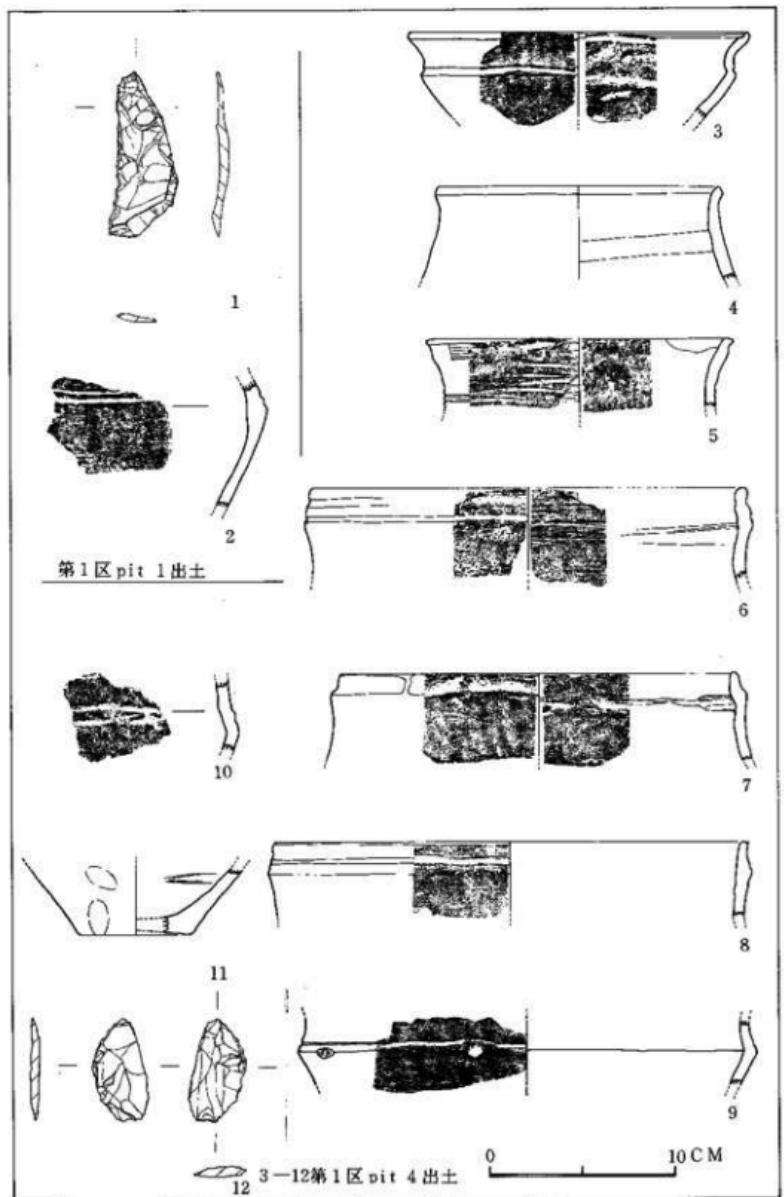
第6図 叩石(第1区)



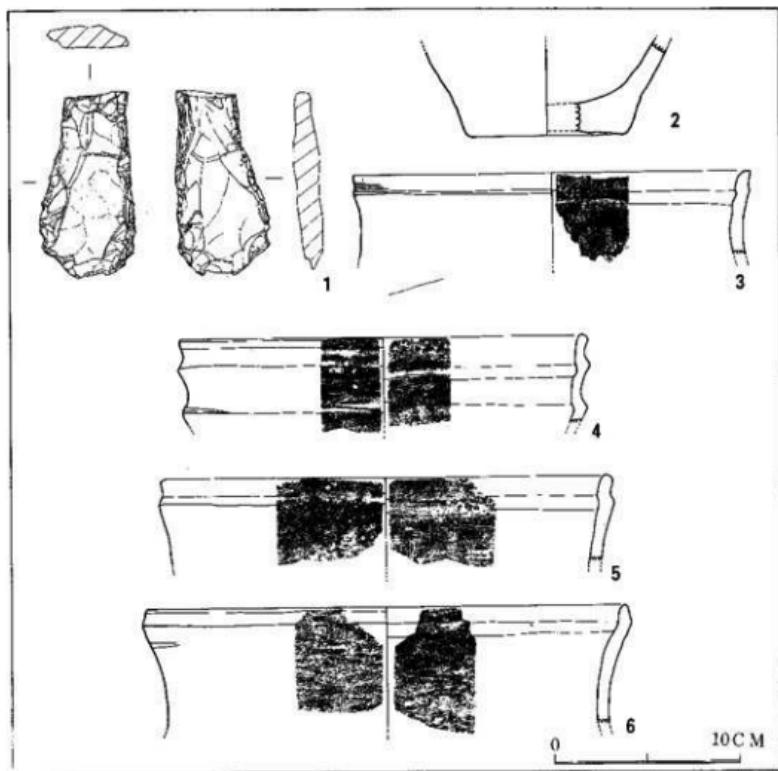
第7図 石斧(第1区)



第9図 第1区全景



第10図 遺物実測図（第1区）



第11図 遺物実測図（第1区）

受けていない部分では旧地表面から約40cm下（現地表面から1m）で黄色粘土層の地山が確認された。

遺構として明確なものはピット1である。深さ50cmのピットからは、多くの小さな木の実など有機物と、土器片及び微小な骨片が出土している。ピット4附近の土層は非常な擾乱を受けており、この土壤の形状は把握し難いところがあった。ただし、出土物等はピット1に似た状態が観察されるので、本来そうしたものであった可能性は否定しきれない。

遺物は上層で採集された中国製の青磁碗の他は、縄文土器が出土した。また石斧を中心とした石器類も比較的目立っている。また出土状態が良くないが、栗の皮が採集されている。



第12図 第1区近景

【第2区】

河岸段丘の水田中に $2\text{m} \times 2\text{m}$ の調査区を設定した。段丘の一番南側の基部の地点で、以前西側の水路を改修した時には遺物の散布が見られたが、耕作土から 20cm 下は堅い黄色粘土層の地山で遺構・遺物は検出されなかった。



第13図 第2区全景

【第3区】

河岸段丘面の西端に近い地点に $4\text{m} \times 4\text{m}$ の調査区を設定した。昭和48年の水路改修時にこの附近から第19図の4、5等の弥生時代の遺物を採集していたので、弥生時代の遺構を検出するべくこの地点を選定した。また、溝の巾を確認するために東側に調査区を拡張した。

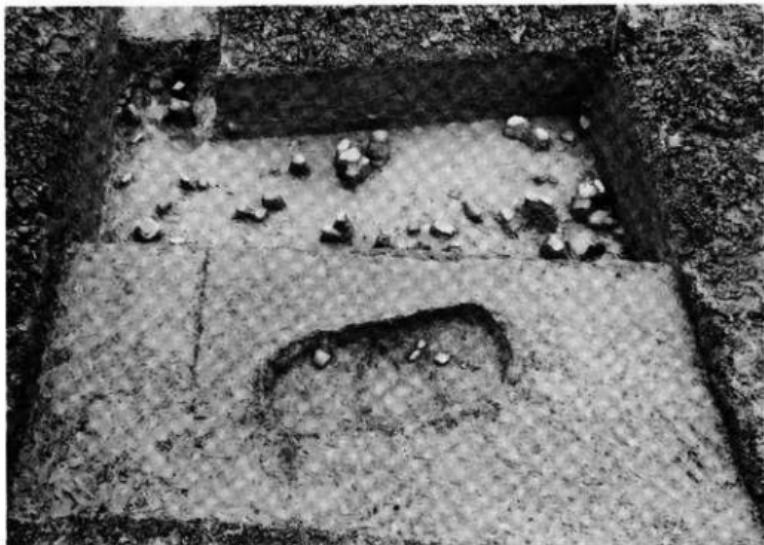
検出された溝は断面逆台形をしており、上巾 2.40m 、下巾 2m 、深さ 0.4m ではば南北に延びるものである。溝の最下層は黒褐色砂質土層であり、その上部に砂層が堆積している。

この砂層中に人頭大よりやや小さい河原石が多数見られたのは第14図に示す通りである。

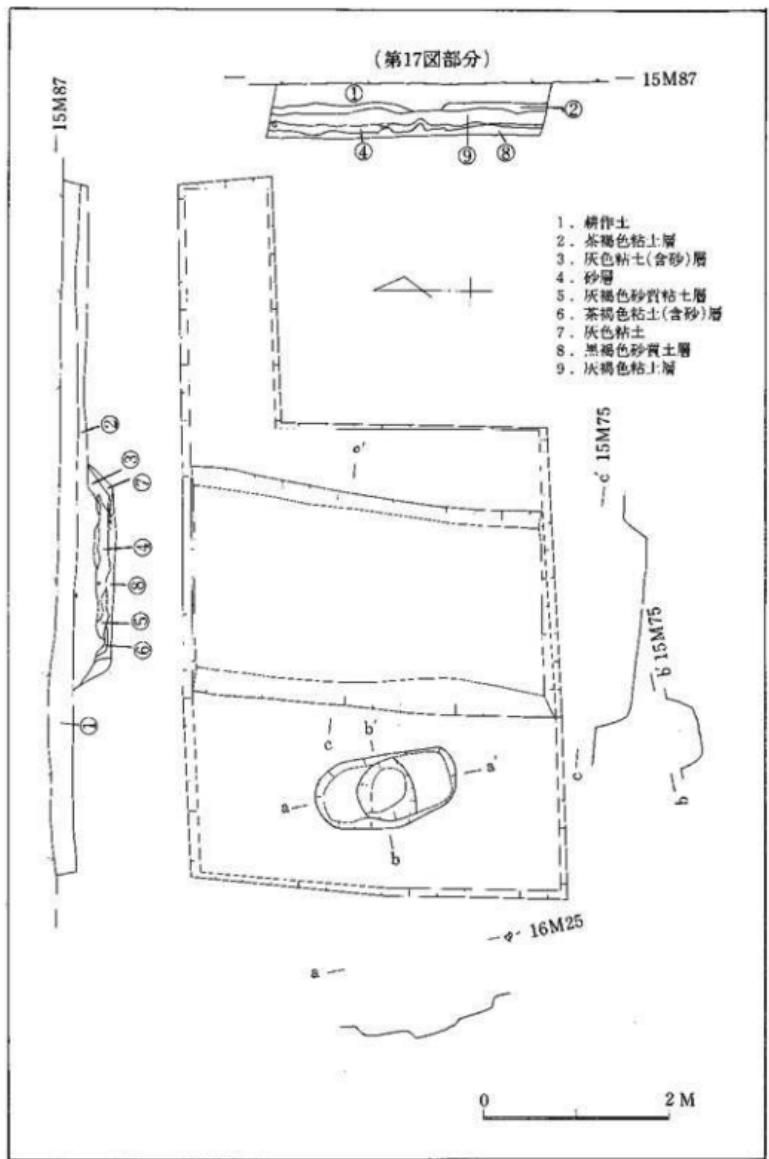
溝内の遺物は少ないが、この砂層以下に含まれるものが多く第18図及び第19図の1の石斧がそうである。また、最下層の砂質土層中にはシダの一種なども含まれていた。なお、砂層より上位の溝内堆積層には遺物は皆無の状態で、溝の壁に貼り付くような形でわずかに遺物が検出された。第3調査区で確認された限りでは、この溝から出土した遺物の最も新しいものは弥生前期の壺の口縁である。追加すべきことに土錐と石錐の出土がある。高津川に面したこの遺跡での人々の生活の一面向を具体的に立証するものとして見逃せない。

第3調査区では、他に溝のすぐ近くから土壙が検出された。長径1.5m、短径0.8m、深さ0.3mで底部が段状になって中心が最も深い。この深い落ち込みになっている中心部の上面、すなわち土壙内の他の床面と同一レベルの面上に緑灰色の微砂が堆積していた。また、土壙内からは骨片が検出されている。なお、この土壙の上部から第21図のように弥生土器の底部（第20図2）が出土している。

第3調査区では、実測図に掲げたように縄文土器も出土しているが、それぞれの遺構の下限はいずれも弥生土器によって示されている。



第14図 第3区



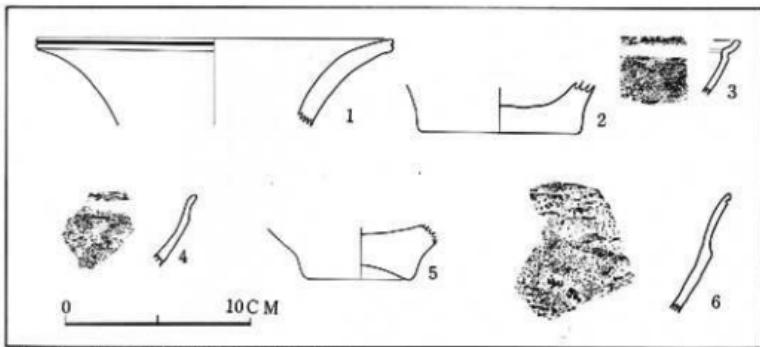
第15図 第3区実測図



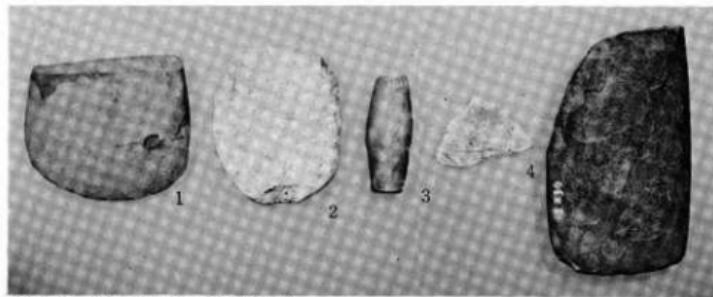
第16図 第3区溝



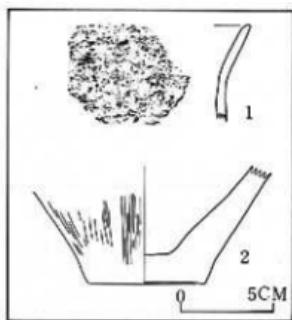
第17図 第3区溝内堆積土層



第18図 遺物実測図（第3区溝内出土）



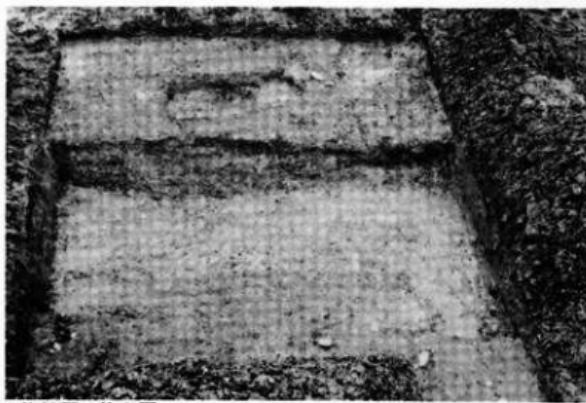
第19図 遺物（第3区及び表採）



第20図 遺物実測図
(第3区土壤内出土)



第21図 第3区土壤



第22図 第3区



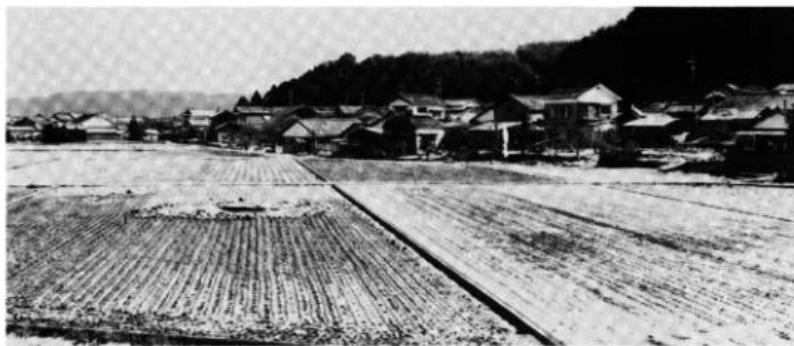
第23図 第3区

【第4区】

平野の北側への拡がりを見るため、水田部に $4\text{ m} \times 4\text{ m}$ の調査区を設けた。水田による耕作と粘土分の強い土壤のため遺構の判別が非常に困難であった。また地山までの土層が40cm程度で薄いこともこれに影響している。

耕作土と淡黄灰色粘土を20cmばかり取除くと一枚目の遺物出土の面が検出される。第28図の土層図の3-(1)の褐色粘質土層上で確認されるものであり、中国製の玉縁状の白磁碗及び糸切り底の土師質皿などが主で、若干の縄文土器片が混入している。

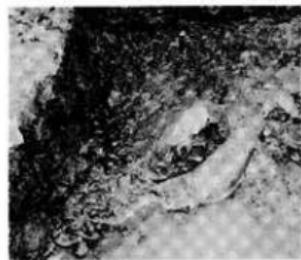
二枚目の遺物検出面は表土下約30cmで観察される。この面では多数の小さなピットと上巾60~70cm、下巾30~50cmの浅い溝が検出されている。この面では縄文土器・弥生土器及び糸切り底の土師質土器が出土している。第32図の1(第33図)の石斧はここから出土している。第31図の1は羽状文をもつ前期弥生土器で第26図に見るよう溝の中から出土した数少ない遺物の一つである。



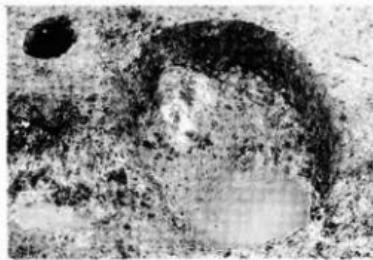
第24図 第4区近景



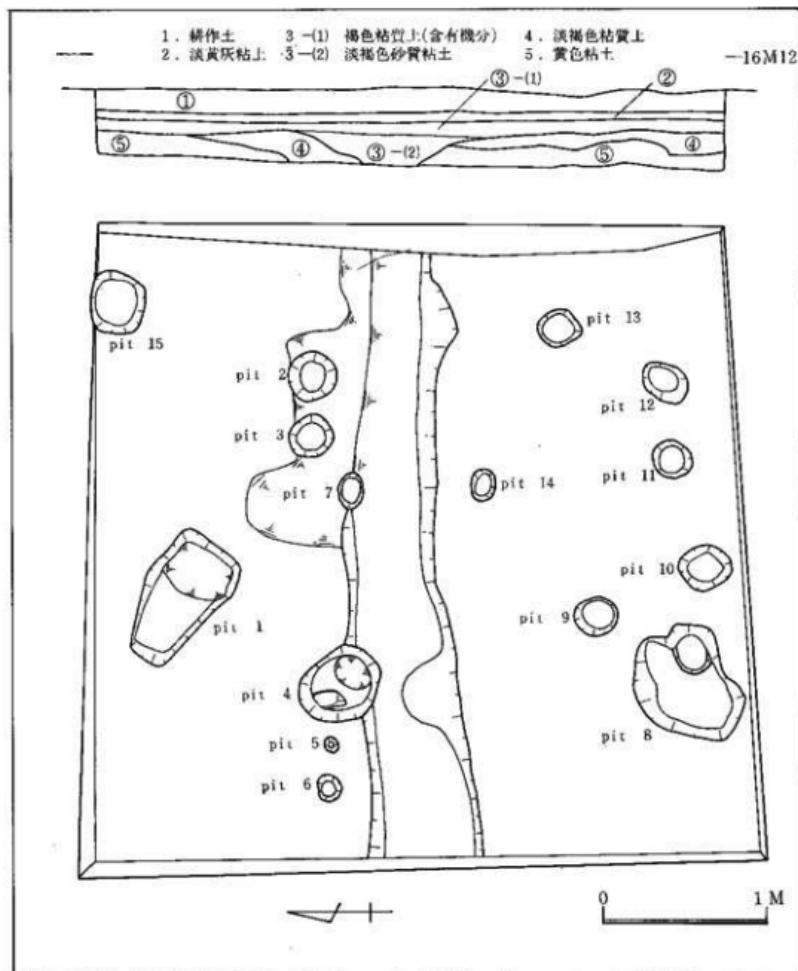
第25図 第4区



第26図 土器出土状態(第4区溝内)

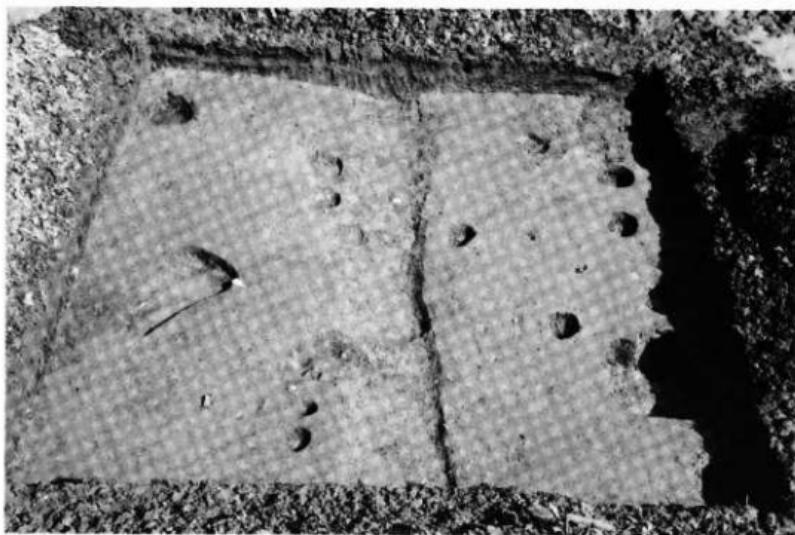


第27図 第4区遺溝(Pit 4)

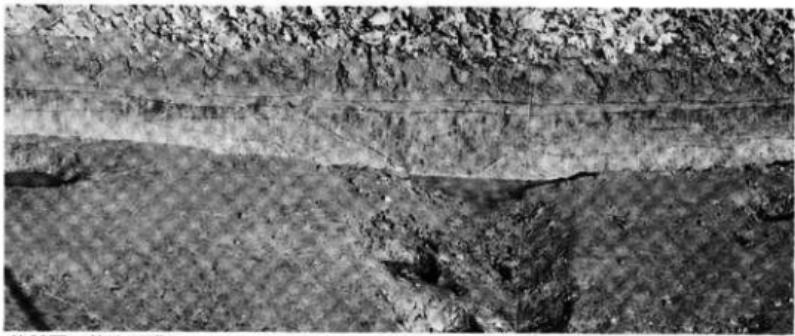


第28図 第4区実測図

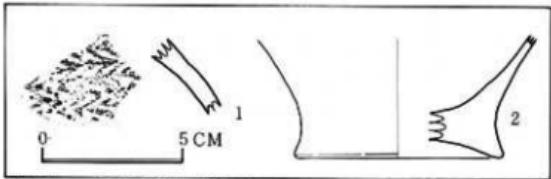
第28図のピット2や4は他のものに比べやや上面から掘込みが確認でき、炭化物を伴っていた。また土師質土器を出土することは、第1の遺構面から掘り込まれていた可能性が高い。なお、1点だけであるが上部から弥生時代後期の土器が採集された。



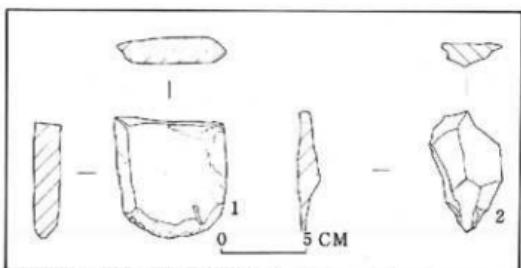
第29図 第4区遺構



第30図 第4区溝



第31図 第4区遺物実測図



第32図 遺物実測図（第4区）



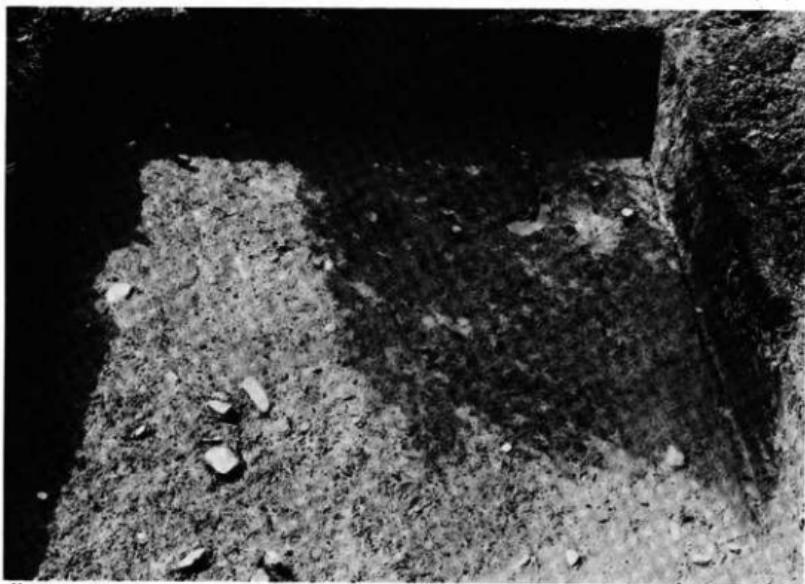
第33図 石斧（第4区）

【第5区】

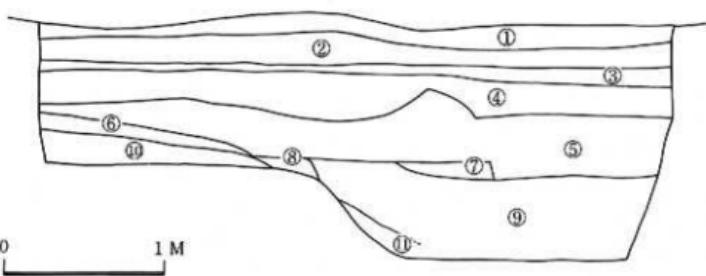
第1区の南東約20m地点の宅地の庭に4m×4mの調査区を設けた。この調査区は今回の調査では国道9号線近くの最も丘陵に近い部分で、なだらかな傾斜地形をしている。

発掘の結果、上部はゴミ捨て用の穴で相当な搅乱を受けていることが判明した。各層毎に土器片を含み、調査区の北側では表土下70cmで地山が確認されたが、南側では表土下1・7mでもシルト質粘土層が続いている。大変遺憾なことであったが調査の都合により地山まで確認することができず、遺構の存在を充分に把握できなかった。

しかしながら、調査区の東側半分では段状の落ち込みが見られ、これより下層からは大量の土器片が出土している。調査面積が狭いのでこれの性格についても判然としないが、何ら

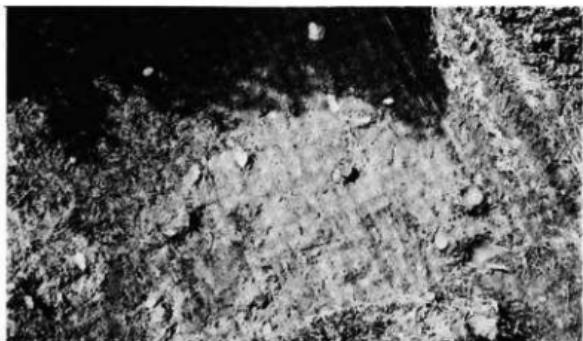


第34図 第5区

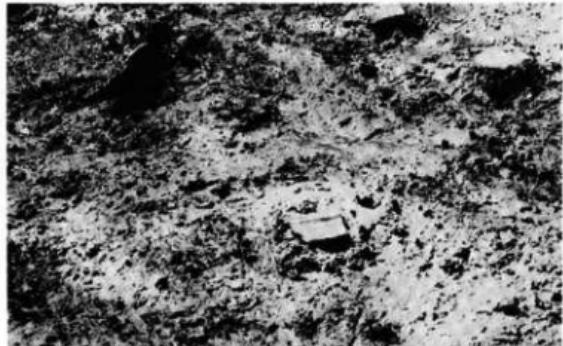


第35図 第5区（東壁土層図）

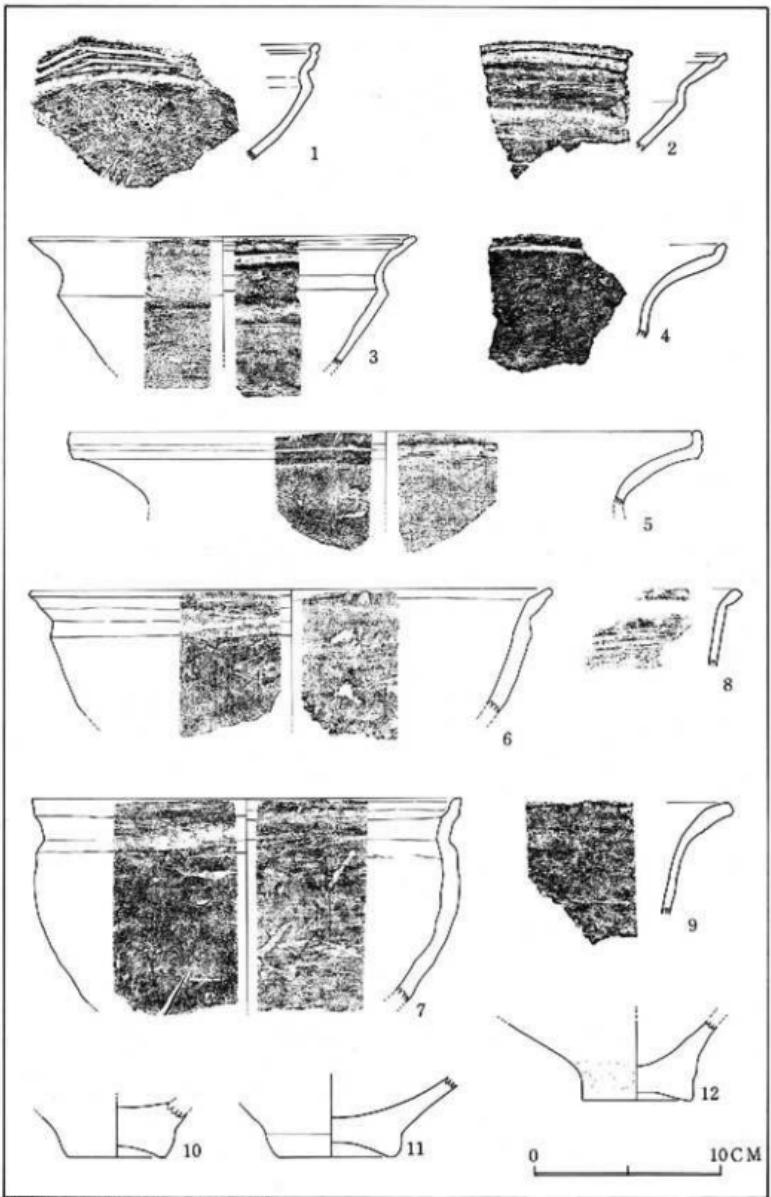
1. 黒褐色土
2. 茶褐色粘質土
3. 褐色粘質土
4. 茶褐色粘質土
5. 褐色粘土
6. 淡黃褐色粘土
7. 暗茶褐色砂質土
8. 淡褐色粘土
9. 褐色粘質土
10. 黄色粘土（地山）
11. 黄灰色シルト質粘土



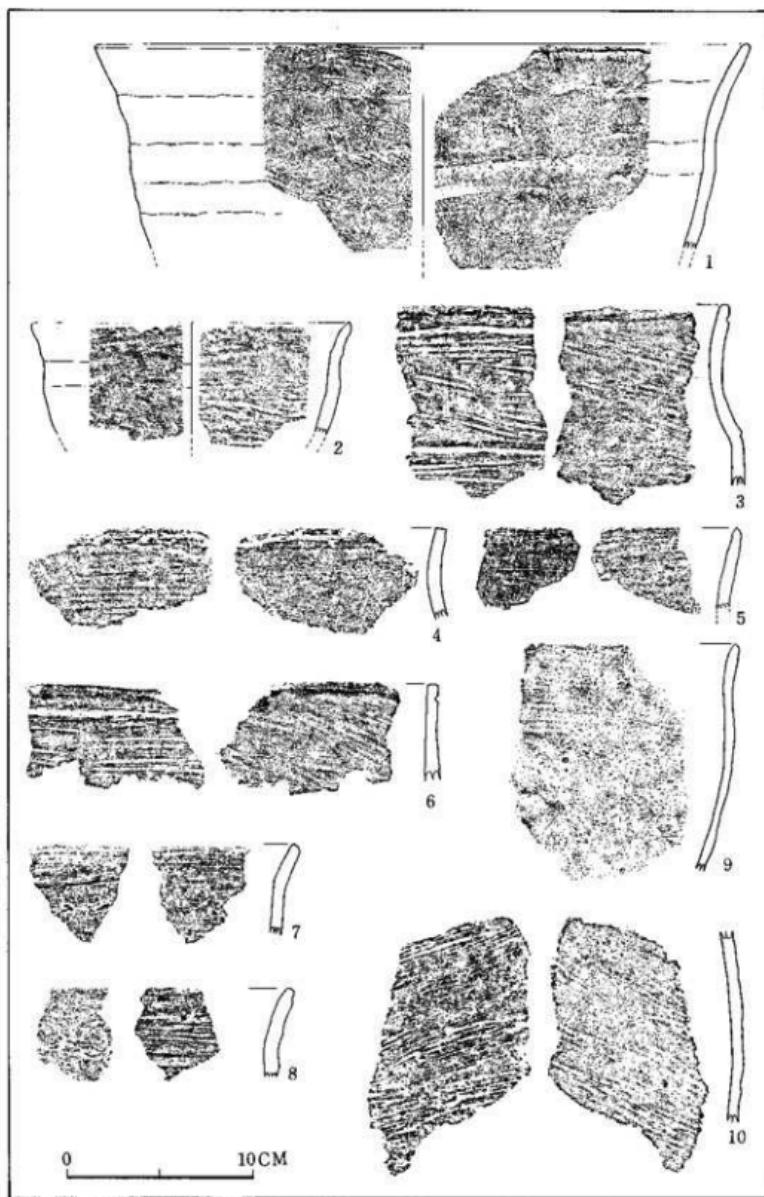
第36図 遺物出土状態（第5区）



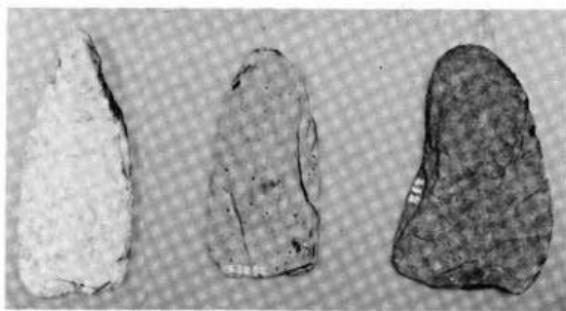
第37図 遺物出土状態（第5区）



第38図 遺物実測図（第5区）



第39図 遺物実測図（第5区）



第40図 石斧（第5区）

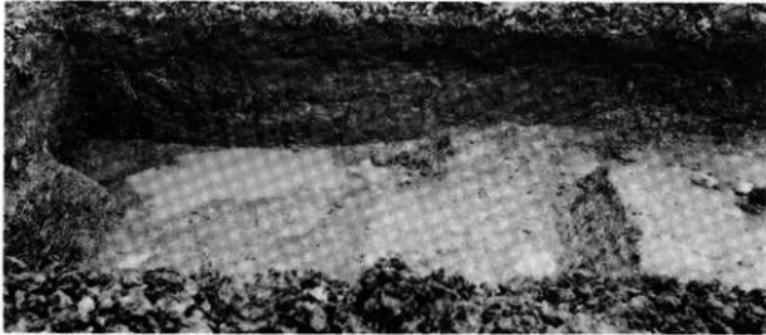
かの遺構の可能性も捨て切れない。いずれにしても、縄文時代晚期前半と考えられる土器が相当高い密度で出土したことは、この時期の遺跡の立地の性格を知る上で大いに参考になる。

遺物としては土器の外に打製の粗雑な石器、栗の皮などの植物遺体や炭化物がある。また人頭大に近い河原石が多く注意をひいた。多量の土器片はすべて縄文晚期前半のものであるので、他の遺物もこれと同時代のものと考えて差支えあるまい。

【第6区】



第41図 第6区



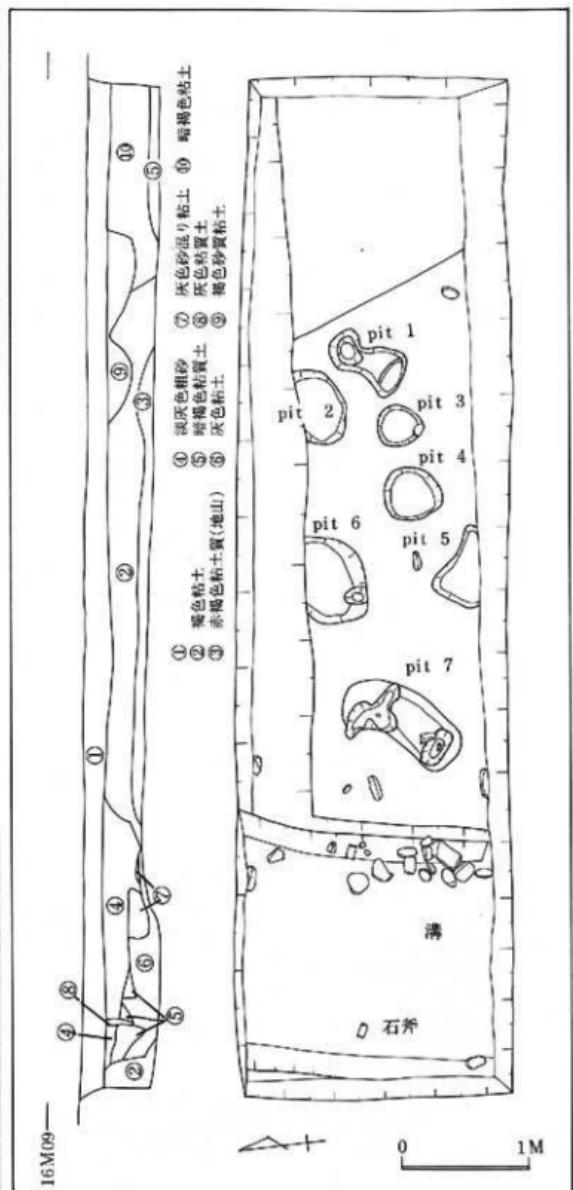
第42図 溝（第6区）

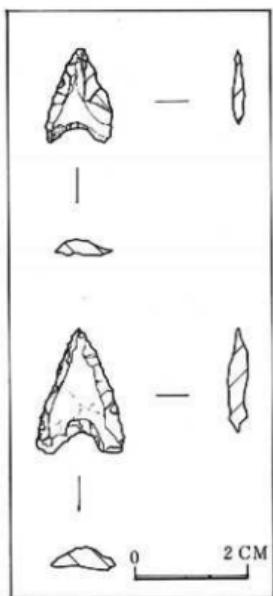


第43図 土器出土状態
(第6区)



第44図 石斧 (第6区)





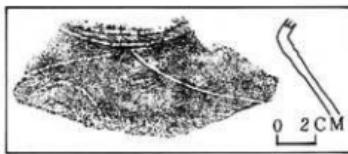
第46図 遺物実測図
(第6区)



第48図 第6区



第47図 溝(第6区)



第49図 遺物実測図(第6区)

第3区の溝がどのように延びているかを把握するため南側に2m×8mの調査区を設定した。調査区の西側隅に上巾2m、下巾1・6mの溝が検出され、その方向よりして第3区の溝の延長部分にあたると考えられる。なお、第6区は河岸段丘の縁辺部であり、この溝の一方の端はこの周辺で終ることになる。

溝内の遺物としては第44図の磨製石斧がある。粗砂層の上部で出土したが片側が欠損している。

他は識別が難かしい土層の堆積状態であったが、径40cm程度の不定形のピットが検出された。これらのピットの一つからすり消縄文をもつ縄文時代後期の土器が発見されたが、他は大部分晩期前半のものであった。

なお、第6区では耕作土の下から石鏡が4点出土している。これまでの採集例からすると石鏡は段丘の縁辺に多い。

IVまとめ

今回の発掘調査の結果、安富王子台遺跡の範囲は、従来考えられていたものより、相当広く展開していることが明らかになった。

すなわち、従来は椋忠姫氏宅裏の地点が考えられていたが、第5区の調査結果を踏まえれば、東側は王子台の丘陵の裾、国道9号線の附近にも遺構と遺物の存在が予想される。この周辺は縄文時代晩期の遺物が集中しており、それは宮内氏宅敷地にも一部かかるものであろう。

水田部分では、第6区・第3区で縄文土器を図示したように、さらに第3区の北100mの田畑から石鏡が採集されたように、広い範囲で縄文時代の遺物が発見されており、この一帯にも何かの遺構の存在が予想される。

弥生時代の遺物は、第3区、第4区で出土しており、昭和48年の水路工事に伴う踏査でも第6区の東側一帯で遺物が採集されているので、第2区の近くでも遺構を検出する可能性は高い。また、第4区で1本の溝が検出されており、遺跡はさらに北側に拡がりを持っていることを具体的に証明している。

遺跡の性格を物語るものとして第3区・第6区の溝、及び土壙墓等がある。この溝が弥生時代前期には遅くとも造られているとすれば、現時点では居住空間を区切るものと考えられないこともない。今少しその全体を知りたいところであるが、土壙墓の存在を併わせ考えると当時の村落の復原に重要な意味を持つものであるのは間違いない。第1区のピットも同様に縄文社会の生活を考える上で参考になろう。

安富王子台遺跡の範囲は以上見たように非常に広いものであるが、第II章に記したように、この平野には至るところに遺跡があり、人々がこの平野で長期にわたって生活しているのは明らかであるので、この遺跡の位置付けもそうした中で考えることによって、当該地域の歴史の一層の理解が得られることになろう。

附. 益田市安富王子台遺跡の土器と石器

村 上 勇

日本歴史の上で、狩猟採集の縄文社会から、農耕を中心とする弥生社会へ移りかわるという、大雑把な式ができあがって、すでに相当な時間が経過した。この間も、農耕の初現をめぐる研究は引続いて精力的に行なわれた。近年、福岡県板付遺跡で縄文晚期の水田跡が発見されたこと、又、佐賀県菜畠遺跡で縄文晚期の石包丁や炭化米が検出されるなど、この問題も考古学的に新局面を迎えてきたと考えることもできる。

安富王子台遺跡は、昭和20年代の発見以来、中国地方における縄文晚期土器の標式的遺跡として知られていた。（間壁忠彦・潮見浩「山陰・中国山地」『日本の考古学』II 縄文時代昭和40年）「……器面をかざる文様が少ないと、深鉢は条痕、浅鉢は範みがき」という土器の器形によるつくりの差異とが明確になってくる。比較的単純化した内容の型式でありながら、用途によるつくりかたのちがいを明瞭にしめしていることが注目されるのである。これは西日本の晚期縄文式土器の特徴の一つであるから、この型式が晚期に層するものであり、しかも高島黒土B1式にちかい形態をしめしているので、晚期としては古い様相とおもわれる。」（同書）調査の結果は土器についてはこの記述を追認したものとなった。宍道正年氏は、「島根県の縄文式土器集成」1（昭和49年）で、「おおよそ、後期末葉ないし晚期前葉頃と考えられる」としたが、「島根県の縄文土器の研究」（『松江考古』第3号昭和55年）では同じ資料を掲げて、「精製土器を見る限り山陽の晚期初頭に位置づけられる岩田式に酷似し、しかも後期とか晚期後半突帯文の類は共存せず、かなり時間的に限定された様相としてとらえることができる。」としている。

したがって、これまでに知られた安富王子台遺跡の土器については、縄文晚期前半という共通理解が得られていることになる。

さて、この遺跡が注目されたもう一つの理由は、前期弥生七器が採集されていることによる。すなわち、縄文晚期の土器と弥生前期の土器が同一遺跡から出土しており、石見地方における水稻耕作の初現を考え得る有力な手懸りとされてきた。中には、この弥生土器は前期でも後半のものであるとしながら、晚期の土器と強引に時間的な脈絡をつけようとする意見もある。私は、この弥生土器は、山陰地方の土器の研究史に照し合わせて、当然前期前半に位置づけなくてはならないと考えているが、それをもってしても、晚期前半に位置づけられる土器文化と直接的につながりを見出そうとする見解は取り得ないと思う。

西日本の弥生文化は、縄文晚期後半の凸帯文土器文化の土台の上に開花するといわれるが、安富では、いまだこの凸帯文をもつ土器を指摘できない。広義の凸帯文土器が使用されている時期に、人々は横田平野の他の地点に移り住んで生活を続けたと推察するのが現時点の理解の仕方である。いずれにしてもこの遺跡がそうした問題の解明の重要な鍵を握っているのは明白であり、この平野における考古学研究の一層の進展を期待しなくてはなるまい。

次に石器（主に石錠）の材料について整理してみたい。宍道氏は、石材について当初から注意しており、島根県を中心に出土する黒曜石が隠岐島産であることを実証した。また、九

州大分県の姫島からも黒曜石が産出することを紹介し、瀬戸内ですらほとんど見あたらないから、とても山陰にまでは搬入されていないだろうとしている。（昭和49年前掲書）この時点で、安富から採集されていた黒曜石は、隠岐産と考えられていたわけである。

ところが昨年（昭和55年前掲書）、隠岐の黒曜石と異なって乳白色のものが鹿足郡内の遺跡から出土したと指摘して、これを姫島産と判定した。また、「以前から出土が確認されている益田市安富王子台遺跡と合わせて三ヶ所」と、実は姫島産の黒曜石が王子台から採集されていたことに初めて言及した。そして、同書で、隠岐島産の黒曜石について「その分布西限は通摩郡仁摩町鳥居原遺跡」であると、調査結果を報告している。さらに、姫島産の黒曜石が発見された六日市町九郎原1遺跡では、隠岐とも姫島とも色調が異なる非常に黒っぽい黒曜石が同時に検出されており、それは佐賀県腰岳産であろうと見解を述べている。

安富王子台からは、肉眼的に等しく認められる姫島産のもの他に、見た目に黒っぽい黒曜石が今回の調査でもでている。これが隠岐産と異なる程非常に黒っぽいというべきかどうかは、石片が小さいこともあり個々に異なる見解もでてこよう。黒曜石の産地についてはまだ整理が充分とはいはず、地理的にも、ここは北部九州と隠岐とは等間隔の距離にあり、この件については鉱物学的方法によって判断をあおいで結着をつけなくてはなるまい。

石器としては他に石斧や打製の粗雑な石器が出土している。これらの中には縄文農耕の問題と関連して重要な意味をもつものもあるが、ここでは弥生土器と縄文土器に伴う石斧ではその形式が異なることだけ指摘しておきたい。

以上発掘終了に際しこれまで論じられた1、2の事項についてコメントをしておくことにした。

安富王子台遺跡発掘調査概報

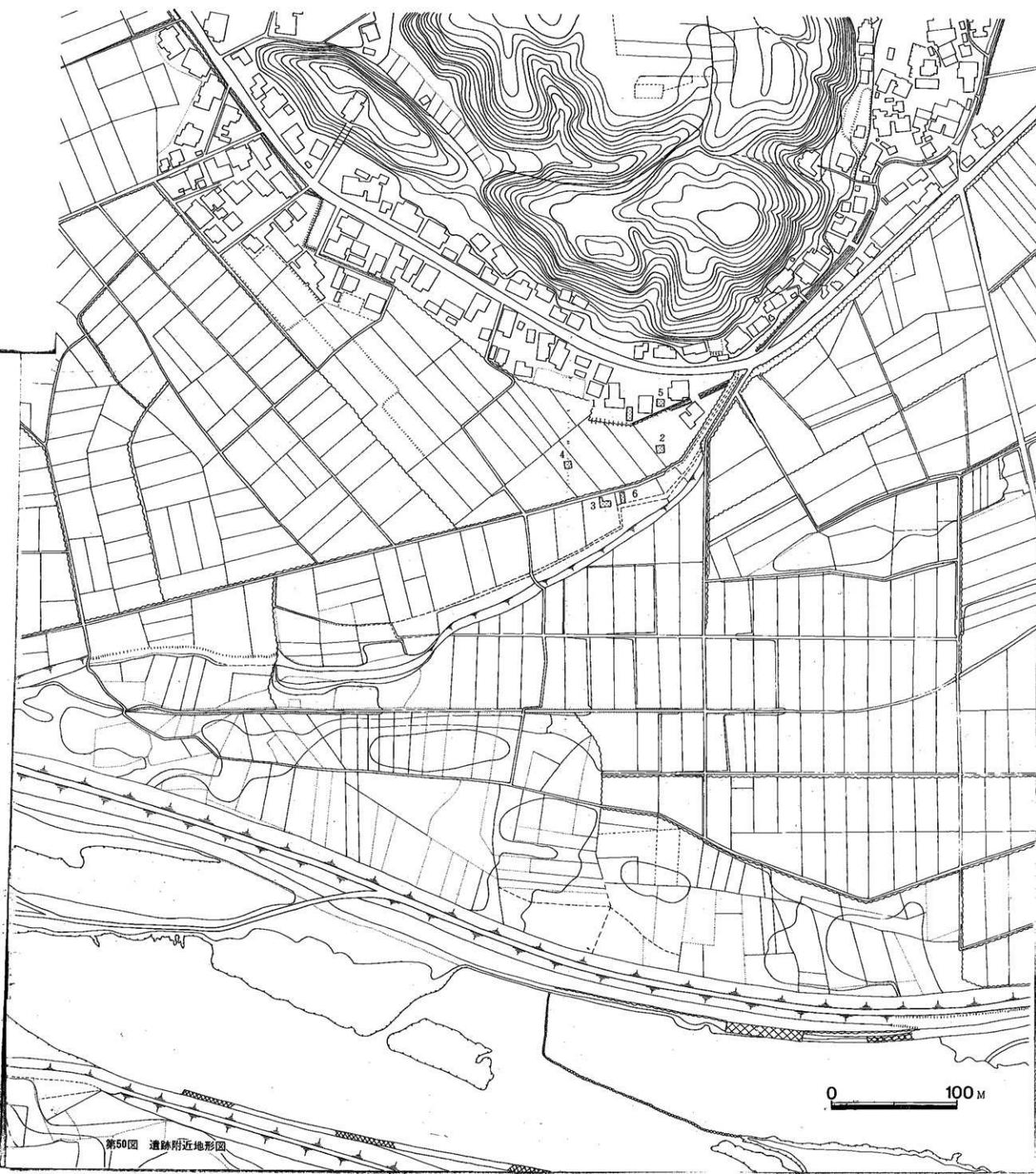
発行 益田市教育委員会

〒698 益田市赤城町18-6

印刷 柏村印刷株式会社

浜田市相生町

昭和56年（1982）3月31日



第50図 遺跡附近地形図